

【供奴 解説】

「拙筆力七呂波」という七変化を演じる歌舞伎舞踊の一節に「供奴」がある。市山七十郎、藤間大助が振り付けをし、中村歌右衛門が踊った。屋号は成駒屋である。歌右衛門は元々、上方の役者であったが、この三代目中村歌右衛門の時に江戸に下った。原典に「浪速師匠」とあるのはこのことを指す。

台提灯とは、手に下げるだけではなく、立てて置ける台付きの提灯のことである。屋外にも置けるのが基本であるから、持ち主が分かるように家紋や屋号などを大きく書き入っていた。



「富士の雪程ある」とは、富士山に多くの雪が積もる意味ではなく、万年雪が「年中ある」という言葉のシヤレである。もともと「富士」は「不死」を意味するので、夏でも溶けずに雪がずっとあるように、ヒビやアカギレが年中あると言っているのだ。

「丹前好み」の丹前とは、綿入りの着物や寝具のことではない。

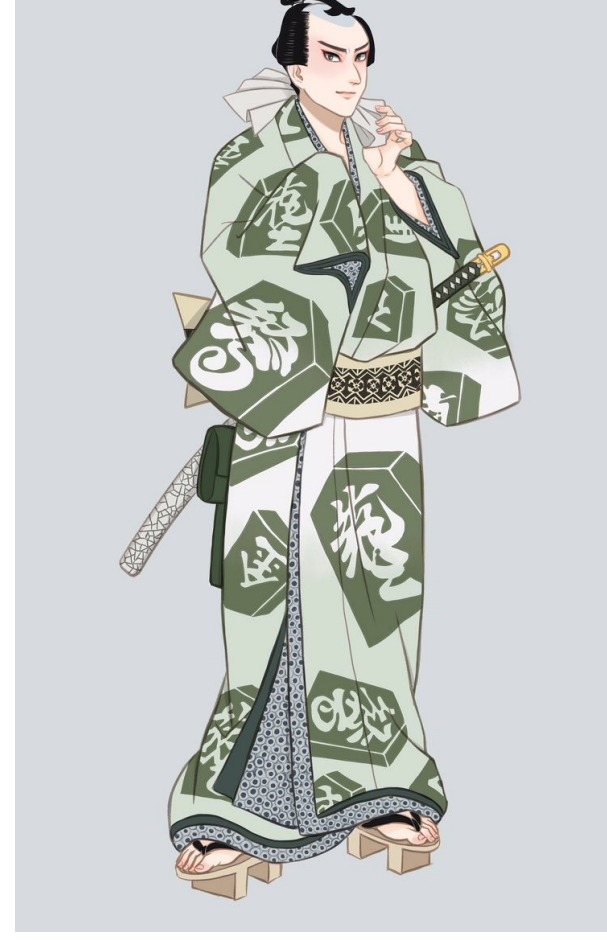
江戸初期の神田佐柄木町に掘丹後守の屋敷があった。その門前

に町風呂（庶民の風呂屋）があったので「丹前」なのである。

この風呂屋では、湯女と呼ばれるカワイ子ちゃんを揃え、遊客を相手にして、垢すり、髪洗いができ、蒸し風呂が主であったと云う。現代では、ひと昔し前の「トルコ」が近い。

元々、特殊風俗営業で、遊廓のようなサービスを提供していたから、明暦の頃に良俗を害するとして禁止された。この「供奴」が上演される一七〇年も前の話である。そこに入入りしていた旗本奴や町奴は、客や湯女の目を引く派手な格好を流行らせ、「丹前姿」と言われるようになった。因みに、伊達姿で町奴の代

表格とされた幡随院長兵衛は風呂場で殺されている。「供奴」の主人が「丹前好み」とは、彼は今で云うファッションヘルス常連の、ファッションも派手好きな色男と云うわけである。



「おはもじながら」以降は、惚気の自慢話である。「去る方」とは「ある人」なのだが、同時に「過去になった女」の含みがある。

はとなの謎掛けは「花」を指すから、元々は「美しいもの」あるいは、その対価である。例えば、芸者さんを占有する時間の料金を「花代」という如くである。また、転じて女性器を意味するこ

である。だから deflower と云えば純潔を奪うという意味となり、中国語では「花を折る」（折花）と云うらしい。「解かせたい」のは謎掛けの方ではなく、女性の帯の方である。

重ね着をしている女性を「八重」とし、脱がせれば「一重」になるとして、八重に咲く花を、一重の花びらとしたいと云う願望の意味である。謎々のほうも、女がその意味するところを理解して、「嬉しい」と恥ずかしそうに伏し目になるのが「下伏し」である

が、同時に男の方は衣服を脱がせる願望が叶って、女を押し倒して「下伏し」にしたことの両方を掛けてある。だからもう、どうにでもなれと続くのである。

初桜は、その年に初めて開花することだから、春とは云え、まだ寒い頃である。大気中の水蒸気は冷えて水滴になる。その水滴が花びらに付着して、まるで化粧したような桜の花が、たまたまなく美しいと言う。

裏の話は、エロ話であって、初桜は初めて挿んだ「ある女」の女性器のことである。性的興奮にある相手の女性は、陰部が濡れてきて、その露で女性器や顔の表情が、化粧をした如くほんのりと紅色に染まるといふ表現である。それを「すつかり、たまらない」と、まるで官能小説なのであるが、その後は「唄いの無い」

三味線演奏が、下ネタとバランスを取るような「聞かせ所」になっている。演奏で観衆を魅了する時間が続く。鼓と三味線だけの演奏パートを「拍子合方」と云う。三味線曲の長唄「供奴」は、この合方の演奏が醍醐味である。

文化譜の併記の箇所は、原典本文の歌詞と同じような表現であるが、これではウラもオモテが隠せないズバリの表現なので、後には歌詞が変えられたと思う。

ほとれは「惚れる」という謎掛けであるから、惚れた女の帯を解いて、重ね着を全部脱がせることに成功して、ベッドインしたとある。原典本文は「八重一重」だが、併記箇所では「三重の帯」と変っている。女性の帯は胴に二巻きする。三重の帯とは、思い焦がれて恋に瘦せて三巻きになったと、恋に落ちたことの誇張である。何せ、見初めて直ぐに瘦せる筈もなからう。

どうして見初めたかは、「小褌を取り遣った」とあるわけだから、女が着物の前合わせをちよっと摘まんで色っぽくポーズを付けて

たのがグツときたとも取れるし、着物の褌（前）の部分に強引に聞いて、露わになった姿がたまらかったから、とも取れる。「小褌を取り遣った」は、相撲の決まり手の「小褌取り」とも掛詞になっており、女の体をひっくり返すわけである。これが後段（2）の「おいどが真つ白で」に繋がる連想ゲームになっている。男の言は何れにせよ婉曲な解釈を取りようがない。

さて、「見染める」は普通、「見初める」と書き、初めて当人に出会い、相手を意識することを指す。転じて、初めて見た異性に恋心を抱く意味となり、更に、互いに思い合って、初めてセックスをする意味にも使われるようになった言葉である。同音の「染め

る」は、「手を染める」と言う如く、事物に着手したり、関係したりと云う意味が、「初める」と共通してある。元は、ある物に色を付けることから、それが転じて、深く心を寄せる意味にもなっている。歌に曰く、

色もなき心を人に染めしより
移ろはむとは思はえなくに

紀貫之（古今和歌集 恋歌）

奴さんは彼女に一目惚れして、アレも見ながら寝ちゃったのだから、ふと目が覚めたのである。その後は、女と罰ゲームの拳酒で負けて、次から次に飲まされたのだ。注がれた杯の回数は、八杯です、ではなく、覚えていない様子。夜通しフラフラになりながら、拳を振り続けたので体も痛くなって、途中で按摩さん

を呼んだらしい。朝になったら、肩に貼った膏薬は縮んでめくれ

ているし、「身柱」（首下）や「猪の目」（腰）と云うツボに据えた、お灸の痕がクツキリと残っていて痛々しかったのである。

拳酒とは二人で指出しジャンケンをして、互いの出した片手の、屈伸させた指数の合計をバツと言いつつ、間違った方が酒を飲まされる。五回セットの勝負であり、一セット終了を「払う（拂）」と云う。「輪揃え」と云う長唄にも出てくる酒宴の遊びである。

言い当てのかけ声は、諸兄も知ってのマージャンの数々である、中国語読み、イー、リヤン、サン、スー・・・である。このゲームは当時、中国に開港していた長崎から入ってきたからであろう。

その先（2）は、奴さん自身の半被を絡めて、お尻丸出しの姿で毛櫓を舞うという解釈もある。しかし、一方では、「真つ白」とある以上、男が巻く上げた女の着物の下から、真つ白なお尻が出る

てきたのである。それは女が「小褌取り」になって、ひっくりかえったからであろう。そのことを連想すれば、ここは、毛櫓をやつて見せる話ではない。

「石突」とは刀の鞘尻や槍の柄尻を保護する為に付けた金具のことだが、その隠語はキノコの最下部（石突）を想像すればお解りであろう。女は男根の首や陰囊（石突）を掌でしっかり握つてきたらしい。

「駒」は馬を意味し、巨根の代名詞である。だから、「成駒」は、いきり立った自身の男根を、「オ、日本一」と舞台への掛け声のように評して茶化しているのである。

作詞者の二代目瀬川如皐は際疾い長唄を書いているのだが、歌舞伎として演じる場合は、役者の踊と、「唄い」の声しか分からないので、素直に聞いた初観客とニヤリと聞いた料客の、

両方の人気を博さねばならない立場だ。ご主人様好きの、おっちょこちよいの奴さんを、途中に下ネタを挟んで、どこか憎めな

途中中で転調を施し、聞かせ所を何力所か入れているサービスである。

令和四年元旦

大中臣正比呂 記す